

表現に役立つ言葉

意見を述べる活動 ↓ P185へ

- ……という観点から考えると…… **考** 課題を設定する
- ・地球環境に配慮しているかという観点から考えると、今の提案は不十分ではないかと思えます。
- ……だとすれば、……と考えられます **考** 推論する
- ・もし安全だとすれば、反対も同様に考えられるのではないかと……ということから……といえます **考** 定義する
- ・温度によって変わることから、それは不変ではないといえます。
- まとめると、……ということになります **考** 総括する
- ・まとめると、明日決行してもよいということになります。
- ……という順序で考えると **考** 順序づける
- ・今年の学校行事のメインイベントを、場所、時間、人数という順序で考えると、ふさわしいものが決まるのではないでしようか。
- しかし……ということが考えられます **考** 予想する
- ・しかし、がんばりすぎてけがをしてしまうということが考えられます。

議論や討論をする活動 ↓ P229へ

- ……については調べましたか **考** 解決を見通す
- ・安全性については調べましたか。
- もちろん……だと思えますが…… **考** 予想する
- ・もちろん大人数でできるスポーツだと思いますが、安全性についてはどうでしょうか。
- ……(という)場合にもいえますか **考** 一般化する
- ・そのことは女子と男子が混合で行う場合にもいえますか。
- ……と比べると、…… **考** 比較する
- ・去年までの結果と比べると、今年はだいぶ下がってきています。
- そのことは……にもあてはまりますか **考** 一般化する
- ・そのことは、遠くから通っている人にもあてはまりますか。
- ……に賛成(反対)の立場ならば…… **考** 推論する
- ・施設のバリアフリー化に反対の立場ならば、その理由を述べる必要があります。
- ……に共通点がありますか **考** 共通点を見つける
- ・ハルさんとアキさんの意見に共通点がありますか。

質問や評価をする活動 ↓ P51へ

- ……というのはなぜですか **考** 課題を提示する
- ・電車で移動するのが最適だというのはなぜですか。
- ……のほかに意見がありますか **考** 多角的に考える
- ・社会福祉施設への訪問のほかに意見がありますか。
- ……が違(ちが)う場合はどうですか **考** 比較する
- ・服装が違(ちが)う場合はどうですか。
- ……に何か問題はありませんか **考** 評価する
- ・その結論に何か問題はありますか。
- ……と考える前提はなんですか **考** 検証する
- ・「最近の若者は、言葉づかいが乱れている」と考える前提はなんですか。
- ……をどのように直せばよくなりますか **考** 改善する
- ・今の意見をどのように直せばよくなりますか。
- ……をまとめるとどうなりますか **考** 総括する
- ・アキさんの意見をまとめるとどうなりますか。

考は、考えるときの観点として生かそう！
使い方の例を参考に、どんなときにどんな表現を使ったらよいか、考えてみよう。



伝えたいことを整理して書く活動 ↓ P45・225へ

- まず……／初めに…… **考** 順序づける
- ・まず、本調査の概要について説明します。
- 一つめは……、二つめは…… **考** 順序づける
- ・一つめは運動能力の向上、二つめは安全性についてです。
- ここでは……について明らかにします **考** 課題を設定する
- ・ここでは、通学路の交通事故と下校時間の関係について明らかにします。
- ……から……のように整理できます **考** 特徴を見つける
- ・以上の調査結果から、私たちのクラスのSNS使用率は、上記のグラフのように整理できます。
- まだわかっていないことは……です **考** 課題を提示する
- ・まだわかっていないことは、私たちの中学校の生徒の携帯電話の使用率です。
- ……については課題が残っています **考** 課題を提示する
- ・自転車通学を許可する範囲については課題が残っています。
- ……によると、……ということです **考** 定義する
- ・警察署によると、近年特に増えた事故の原因は、歩きスマホによる前方不注意だということです。

相手や場に考慮して書く活動 ↓ P75へ

- いかがですか(でしたか)
- ・夏休みはいかがでしたか。
- ……さしあげます
- ・日時が決まりましたら、こちらから改めてご連絡をさしあげます。
- ……ではありませんか
- ・突然のお知らせで、大変驚かれたではありませんか。
- ……と申します(申しあげます)
- ・私は青葉中学校の田中と申します。
- ……でございます(ました)
- ・先日はお話をしていただき、ありがとうございました。
- ……でしょうか
- ・その後、お元気で過ごしてでしょうか。

自分の考えを書く活動 ↓ P103へ

- ……と関連することは…… **考** 関係づける
- ・……と関連することは、表情の動きである。
- 例えば…… **考** 事例をあげる
- ・例えば、次のようなことがありました。
- このことから……ということがいえます **考** 定義する
- ・このことから、仲間は大切だということがいえます。
- なぜなら……(だ)からです **考** 理由をあげる
- ・なぜなら全員が自分の考えをいつでも正しいと信じていると、人間関係を悪くしかねないからです。
- ……のように考えれば、……といえるはず **考** 推論する
- ・以上のように考えれば、対策の効果は長く続くといえるはずで
- よって……が必要なのです **考** 解決を見通す
- ・よって、今までの経験が必要なのです。
- ……と比べると、……がわかります **考** 比較する
- ・第二回の実験結果と比べると、最初の実験のほうが、適切な方法であったことがわかります。

友達と話し合ったり、自分の伝えたいことを書いたりするとき
に、このページを活用しよう！



小倉百人一首

お正月のかるた大会などでおなじみの『百人一首』は、十三世紀に藤原定家が撰じたものといわれています。当時著名だった百人の歌人の歌を、一人につき一首ずつ選んで集めてあります。かるたとして楽しむだけではなく、和歌としても楽しんでみるとよいでしょう。

1 秋の田のかりほの庵のとまをあらみ
わが衣手は露にぬれつつ
天智天皇

2 春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣干すてふ天の香具山
持統天皇

3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜をひとりかも寝む
柿本人麻呂

4 田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ
山部赤人

5 奥山に紅葉路み分け鳴く鹿の
声聞く時ぞ秋は悲しき
猿丸大夫

6 かささぎの渡せる橋に置く霜の
白きを見れば夜ぞ更けにける
中納言家持

7 天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも
安倍仲麻呂

22 吹くからに秋の草木のしをるれば
むべ山風をあらしと言ふらむ
文屋康秀

23 月見れば千々に物こそ悲しけれ
わが身ひとつの秋にはあらねど
大江千里

24 このたびは幣も取りあへず手向山
紅葉の錦神のまにまに
菅家

25 名にし負はば逢坂山のさねかづら
人に知られてくるよしもがな
三条右大臣

26 小倉山峰のもみち葉心あらば
今ひとつたびのみゆき待たなむ
貞信公

27 みかの原わきて流るいづみ川
いつ見きとてか恋しかるらむ
中納言兼輔

28 山里は冬ぞ寂しさまさりける
人目も草もかれぬと思へば
源宗朝臣

29 心あてに折らばや折らむ初霜の
置き惑はせる白菊の花
凡河内躬恒

30 有明のつれなく見えし別れより
暁ばかり憂きものはなし
壬生忠岑

8 わが庵は都のたつみしかぞ住む
世をうち山と人は言ふなり
喜撰法師

9 花の色は移りにけりないたづらに
わが身世にふるながめせし間に
小野小町

10 これやこの行くも帰るも別れては
知るも知らぬも逢坂の関
蟬丸

11 わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよ海人の釣舟
参議篁

12 天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ
をとめの姿しばしとどめむ
僧正遍昭

13 筑波嶺の峰より落つるみな川の
恋ぞつもりて淵となりぬる
陽成院

14 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに
乱れそめにしわれならなくに
河原左大臣

31 あさばらけ有明の月と見るまでに
吉野の里に降れる白雪
坂上是則

32 山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり
春道列樹

33 久方の光のどけき春の日に
静心なく花の散るらむ
紀友則

34 誰をかも知る人にせむ高砂の
松も昔の友ならなくに
藤原興風

35 人はいさ心も知らず古里は
花ぞ昔の香ににほひける
紀貫之

36 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月宿るらむ
清原深養父

37 白露に風の吹きしく秋の野は
貫きとめぬ玉ぞ散りける
文屋朝康

38 忘らるる身をば思はず誓ひてし
人の命の惜しくもあるかな
右近

39 浅茅生の小野の篠原忍ぶれど
あまりてなどか人の恋しき
参議等

15 君がため春の野に出て若菜つむ
わが衣手に雪は降りつつ
光孝天皇

16 立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かば今帰り来む
中納言行平

17 ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは
在原業平朝臣

18 住の江の岸に寄る波よるさへや
夢の通ひ路人目よくらむ
藤原敏行朝臣

19 難波濁短き蘆のふしの間も
逢はてこの世を過ぐしてよとや
伊勢

20 わびぬれば今はた同じ難波なる
みをつくしても逢はむとぞ思ふ
元良親王

21 今来むと言ひしばかりに長月の
有明の月を待ち出でつるかな
素性法師

40 忍ぶれど色に出てにけりわが恋は
物や思ふと人の問ふまで
平兼盛

41 恋すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか
壬生忠見

42 契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山波越さじとは
清原元輔

43 逢ひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり
権中納言敦

44 逢ふことの絶えてしなくはなかなか
人をも身をも恨みざらまし
中納言朝忠

45 あはれとも言ふべき人は思ほえて
身のいたづらになりぬべきかな
謙徳公

46 由良の門を渡る舟人楫を絶え
行方も知らぬ恋の道かな
曾禰好忠

47 八重葎しげれる宿の寂しきに
人こそ見えね秋は来にけり
忠慶法師

48 風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
くだけて物を思ふころかな
源重之

49
みかきもり衛士のたく火の夜は燃え
昼は消えつつ物をこそ思へ
大 中 臣 能 宣 朝 臣

50
君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと思ひけるかな
藤 原 義 孝

51
かくとだにえやはいぶきのさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを
藤 原 実 方 朝 臣

52
明けぬれば暮るものとは知りながら
なほ恨めしき朝ぼらけかな
藤 原 道 信 朝 臣

53
嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は
いかに久しきものとは知る
右 大 将 道 綱 母

54
忘れじの行く末まではかたければ
今日を限りの命ともがな
儀 同 三 司 母

55
滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞こえけれ
大 納 言 公 任

56
あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今ひとたびの逢ふこともがな
和 泉 式 部

57
めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に
雲隠れにし夜半の月かな
紫 式 部

76
わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの
雲居にまがふ沖つ白波
法 性 寺 入 道 前 関 白 太 政 大 臣

77
瀬を早み岩にせかる滝川の
割れても末に逢はむとぞ思ふ
崇 徳 院

78
淡路島通ふ千鳥の鳴く声に
幾夜寝覚めぬ須磨の関守
源 兼 昌

79
秋風にたなびく雲の絶え間より
もれ出づる月の影のさやけさ
左 京 大 夫 顕 輔

80
長からむ心も知らず黒髪
の乱れて今朝は物をこそ思へ
待 賢 門 院 堀 河

81
ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ残れる
後 徳 大 寺 左 大 臣

82
思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪へぬは涙なりけり
道 因 法 師

83
世の中よ道こそなけれ思ひ入る
山の奥にも鹿ぞ鳴くなる
皇 太 后 宮 大 夫 俊 成

84
長らへばまたこのごろやしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき
藤 原 清 輔 朝 臣

58
有馬山猪名の笹原風吹けば
いてそよ人を忘れやはする
大 式 三 位

59
やすらはて寝なましものを小夜更けて
かたぶくまでの月を見しかな
赤 染 衛 門

60
大江山いく野の道の遠ければ
まだふみもみず天の橋立
小 式 部 内 侍

61
いにしへの奈良の都の八重桜
けふ九重ににほひぬるかな
伊 勢 大 輔

62
夜をこめて鳥の空音ははかるとも
よに逢坂の関はゆるさじ
清 少 納 言

63
今はただ思ひ絶えなむとばかりを
人つてならて言ふよしもがな
左 京 大 夫 道 雅

64
あさばらけ宇治の川霧たえだえに
あらはれわたる瀬々の網代木
権 中 納 言 定 頼

65
恨みわびほさぬ袖だにあるものを
恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ
相 模

66
もろともにあはれと思へ山桜
花よりほかに知る人もなし
大 僧 正 行 尊

85
夜もすがら物思ふころは明けやらで
聞のひまさへつれなかりけり
俊 恵 法 師

86
嘆けとて月やは物を思はする
かこち顔なるわが涙かな
西 行 法 師

87
村雨の露もまだひぬ榎の葉に
霧たちのぼる秋の夕暮れ
寂 蓮 法 師

88
難波江の蘆のかりねのひとよゆゑ
みをつくしてや恋ひわたるべき
皇 嘉 門 院 別 当

89
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば
忍ぶことの弱りもぞする
式 子 内 親 王

90
見せばやな雄鳥のあまの袖だにも
濡れにぞ濡れし色は変はらず
殷 富 門 院 大 輔

91
きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに
衣片敷きひとりかも寝む
後 京 極 攝 政 前 太 政 大 臣

92
わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそ知らね乾く間もなし
二 条 院 讃 岐

93
世の中は常にもがもな渚漕ぐ
あまの小舟の綱手かなしも
鎌 倉 右 大 臣

67
春の夜の夢ばかりなる手枕に
かひなく立たむ名こそ惜しけれ
周 防 内 侍

68
心にもあらでうき世にながらへば
恋しかるべき夜半の月かな
三 条 院

69
風吹く三室の山のみち葉は
竜田の川の錦なりけり
能 因 法 師

70
寂しさに宿をたち出でてながむれば
いづこも同じ秋の夕暮れ
良 暹 法 師

71
夕されば門田の稲葉おとづれて
蘆のまろやに秋風ぞ吹く
大 納 言 経 信

72
音に聞く高師の浜のあだ波は
かけじや袖のぬれもこそすれ
祐 子 内 親 王 家 紀 伊

73
高砂の尾上の桜咲きにけり
外山の霞立たずもあらなむ
権 中 納 言 匡 房

74
憂かりける人を初瀬の山おろしよ
はげしかれとは祈らぬものを
源 俊 頼 朝 臣

75
契りおきしさせもが露を命にて
あはれ今年の秋もいぬめり
藤 原 基 俊

94
み吉野の山の秋風小夜更けて
ふるさと寒く衣打つなり
参 議 雅 経

95
おほけなくうき世の民におほふかな
わが立つ袖に墨染の袖
前 大 僧 正 慈 円

96
花さそふ風の庭の雪ならで
ふりゆくものはわが身なりけり
入 道 前 太 政 大 臣

97
来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに
焼くや藻塩の身もこがれつつ
権 中 納 言 定 家

98
風そよぐならの小川の夕暮れは
みそぎぞ夏のしるしなりける
従 二 位 家 隆

99
人もをし人もうらめしあぢきなく
世を思ふゆゑに物思ふ身は
後 鳥 羽 院

100
もしきや古き軒端のしのぶにも
なほあまりある昔なりけり
順 徳 院